

# アバタイの「金剛 (včir)」ハーン号と 16 世紀末ハルハのチベット仏教

新藤 篤 史

## はじめに

いわゆるハルハは現モンゴル国のほぼ全域にあたり、16 世紀初頭に隆盛したモンゴル中興の祖バトモンケ＝ダヤン＝ハーン<sup>1)</sup>が第 11 子ゲレセンジェ＝ジャライル＝ホンタイジ<sup>2)</sup>を封じたことを起源とする。ゲレセンジェには 7 人の息子<sup>3)</sup>がおり、彼らは父の領地を分割し相続した。さらにその子孫らは分裂、統合を繰り返し、17 世紀になると、そのうちの勝者がいわゆるハルハの 3 ハーン、すなわちジャサクト＝ハーン、トシェート＝ハーン、チェチェン＝ハーンとなった。これら 3 ハーンの中のハーンは、チベット仏教によって権威づけられることによってはじまった、それまでのモンゴルにおけるチンギス直系のみに継承されてきたハーン号とはまったく異なる種類のハーン号であった。そして、この 3 ハーンのうち、トシェート＝ハーンは祖アバタイ (1554-1588) のハーン号である。

17 世紀に成立した史料群に描かれるアバタイ像を要約すると、アバタイはゲレセンジェの第 3 子ノノホの長子で、1554 年、父のオトク<sup>4)</sup>がセレンゲ河畔<sup>5)</sup>にあった時に誕生した。14 歳から 27 歳に至るまで常に戦争に明け暮れ、その名が知れ渡ったが、1586 年よりチベット仏教に入信し、その時ダライラマ 3 世<sup>6)</sup>よりハーン号を授けられた。以降、チベット仏教はハルハ全土に広がったとされ、アバタイの曾孫の 1 人はハルハ随一の高僧とされるジェブツンダムパ<sup>7)</sup>となった。アバタイは 1588 年に 35 歳で世を去った。

アバタイについての先行研究としては、宝音徳力根 (1999) が、アバタイとトメト<sup>8)</sup>の首長アルタン＝ハーン<sup>9)</sup>が婚姻関係を基に密接な間柄であったことを明らかにした。また、姑茄瑪 (2008) は、アバタイのハルハにおけるチベット仏教導入の過程を詳細に論じている。ただし、両研究は史料からアバタイの事績を正確に抽出してはいるが、アバタイがダライラマより授けられたハーン号とは具体的に何を意味していたか、またハルハに導入されたチベット仏教は如何なる

内容をもつかなどは不十分であり、さらなる検討の必要があるかと思われる。そこで本稿は、モンゴル語史料とチベット語史料の双方を用いて、アバタイのハーン号とチンギス直系に継承されるハーン号との違いについて、またモンゴル王侯におけるこの時期の王権観について考察し、さらにアバタイがダライラマよりハーン号を授けられる過程で、ハルハにもたらされることになったチベット仏教の特徴を僧侶や寺院を中心に検討する。

なお参考とする史料は、『アルタン＝ハーン伝』(以下、ES)<sup>10)</sup>、『エルデニ＝イン＝トプチ』(以下、ET)<sup>11)</sup>等のモンゴル年代記、アバタイの仏教事績が詳細なハルハの年代記『アサラクチ＝ネレティン＝トゥーフ』(以下、ANT)<sup>12)</sup>、そしてアバタイの曾孫でハルハ随一の高僧とされるジェブツンダムパの伝記『ジェブツンダムパ伝』(以下、KPN)<sup>13)</sup>等である。

## 1. アバタイのハーン号

チンギス＝ハーン出現以後、ユーラシア大陸に出現した遊牧民の王たちが、ハーン号を名乗る際、その真偽はともかくとしてチンギスの血族であることが重要であったことは多くの先人に指摘されている。しかし、17 世紀の史料群にみられる、アバタイについての記述をみると、ET であれ、ANT などのモンゴル文献であれ、KPN などのチベット語史料であれ、そのハーン号はダライラマ 3 世より授けられたことを伝えている。

まず ES、ET はアバタイのハーン号を「ワチライ＝ハーン (včirai qayan)」とし、ANT は「ノモン＝イエケ＝ワチル＝ハーン (nom un yeke včir qayan)」とする。つまり「金剛 (včir)」の言葉が共通している。この「金剛」号はダライラマより授けられたものであることは、ES、ET、ANT、KPN がすべて一致して述べるところである<sup>14)</sup>。

アバタイのハーン号は、後述する清朝史料の『欽定外藩蒙古回部王公表傳』の例にみるように特定の地域や民族以外にも通用したことが確認できる。つまりアバタイのハーン号がダライラマに由来することは 17

世紀以降のモンゴルにおいては、ほぼ共通認識となっていたことが分かるのである。

では、そのような王権観はどのようにしてモンゴル人のうちに具わったのであろうか。モンゴル王侯とチベットの高僧との関係は13世紀のフビライ＝ハーン<sup>15)</sup>とパクパの時代に遡る。フビライは、当初は人質という形でモンゴル宮廷に連れて来られたチベット僧パクパに帰依した<sup>16)</sup>。以来、宮廷の多くの儀礼はチベット仏教に則した形で行われ、フビライとパクパの関係は理想の施主・応供僧として後世に語り継がれるに至った(石濱裕美子 2001 pp.25-44)。そして、このフビライとパクパの関係は、モンゴル人の王侯とチベットの高僧の理想的な関係のモデルとなり、例えば16世紀になってモンゴル全域に覇を唱えた実力者アルタンも、チンギス直系の正統ハーン最後の継承者リンデン<sup>17)</sup>も、フビライがパクパをモンゴルに招いた事績に倣ってチベット仏教の高僧をチベットから招いて帰依したのである。

1578年、トメトの首長アルタンは、チベット仏教ゲルク派の高僧ソナムギャムツォ、のちのダライラマ3世を青海に招き、その地において灌頂を授けられた。アルタンは、フビライと同様に、武力ではなく法輪(仏教)によって世界を統治する「転輪聖王」<sup>18)</sup>としての権威を具えるに至った。アルタンが正統ハーンと並び称されるまでに著名なのは、このフビライの仏教事績を實踐し、チベット仏教に権威づけられるモンゴルの王権観を体現したことも強く影響している。ダライラマの権威が確立した17世紀に記された史料中において、「ダライラマからハーン号を授かったアバタイ像」が定着するのは、アルタンの事績を受けてのことであることは明らかである。

以上の17世紀の史料中にみられるアバタイのイメージが、アバタイの在世中に実際そのままであったかは16世紀の同時代史料が存在しないため断言できない。しかし、宝音徳力根氏などが、ESなどを用いて、同時代のアバタイとアルタンの関係を論じている研究も出ているため、アバタイが在世中においてもアルタンの影響を受けていた可能性はある。両者は出自からして近い間柄であった。この時代のモンゴルは、正統ハーンの継承者とされるバトモンケ＝ダヤン＝ハーンの11人の息子等それぞれの一族によって分割統治されており、アルタンはダヤンの第3子バルス＝ボラトの次子でトメトの首長であった。アバタイは、ダヤンの第11子ゲレセンジェの第3子ノーノホの長子であった。さらに両者は婚姻関係を基により近づいた<sup>19)</sup>

ともいわれている。アルタンの叔父にもあたるゲレセンジェのもとにはアルタンの娘が養女として入り、そのゲレセンジェの養女の娘、すなわち血筋上のアルタンの孫娘はアバタイに嫁いだとされる。

ところで、何人かの研究者が指摘しているように、アバタイが持つもう一つの称号「サイン＝ハーン(sayin qaran)」は、1580年にアルタンによって授けられた<sup>20)</sup>ともいわれている。これは、ANTに記されている「トシェート＝ハーン」にあたるものかと思われる。

[アバタイ]は14歳(1567年)から27歳(1580年)に至るまで、常に戦争に明け暮れ、外敵を自己の権勢下に従わせ、諸々の兄弟を自分と分け隔てなく援助し、最初のトシェート＝ハーン号を捧げられて、その名が世に聞こえる存在となった。(ANT、52r15-23)

※ [ ] は補足。( ) はとくに前の語句の説明。

「最初のトシェート＝ハーン」とされているのは、おそらくANTが著されたとされる1677年の時点で、アバタイの孫の代より始まる「トシェート＝ハーン」号<sup>21)</sup>の継承が世襲ととらえられるようになった後に、代を遡ったアバタイをも「トシェート＝ハーン」と呼ぶ習慣があったからだと考えられる。ANTがダライラマより授けられる「ノモン＝イエケ＝ワチル＝ハーン」とアバタイが以前から持っていたと思われる「ハーン」を使い分けているのは、ハーンの持つ意味がまったく異なると史料の著者が判断していたとも考えられる。これは、KPNにおいても同様である。なお、チベット語で「ハーン」は「王」を意味する「ゲルポ rgyal po」と表記される。

アバタイというハーン(rgyal po)は、マナの驕りをくじくほどの勇氣ある方であり、その方がオイラトに何度も軍隊を興して、何千人ものオイラト人を殺害し、全オイラトを支配に入れた。そして子息の1人をオイラトのハーンに据えて、その後、一切智者ソナムギャムツォがモンゴル国にいらっしゃった時、謁見にお出ましになった。応供と施主(ソナムギャムツォとアバタイ)は心をつにして、パグモドゥ＝ドルジェゲルポ<sup>22)</sup>の火に燃えないタンカを賜って、ドルジェゲルポ(rdo rje = 金剛 rgyal po)の名も賜った。(KPN、63a-63b)

ANTとKPNを見て分かるように、アバタイにはダライラマよりハーン号を授けられる以前から別のハーン号を持っていたことが暗示されている。それがアバタイの持つもう1つの称号「サイン＝ハーン」であったかもしれないが、『欽定外藩蒙古回部王公表傳』ともなると、ハーン号は存在すらしないものとなっている。

初、喀爾喀無汗號、自阿巴岱赴唐古特<sup>23)</sup>、謁達賴喇嘛、迎經典歸、為衆所服、以汗稱（『欽定外藩蒙古回部王公表傳 卷四十五、p499』）

17世紀以降、モンゴル王侯にとってのハーン号はダライラマより授けられることでそれまでの、例えばチンギス直系に継承されるハーン号とはまったく異なる権威が具わっていった。アバタイはちょうどそのハーン号における王権観の変わり目に位置したのではないかと思われる。アルタンとの関係が近かったことは、アバタイがチベット仏教に入信するきっかけになったともいわれ、それは次章以降で述べるように、ハルハにおける初期のチベット仏教を指導したと思しき僧侶がアルタンより派遣されることから判断できる。そして、もしアバタイがダライラマに謁見する以前にも別のハーン号を持っていたのだとしたら、アバタイにとってチベット仏教に入信することで得られる権威とは、当初はハーン号とはまったく異なる権威であったことも考えられる。それは、アルタンがダライラマより授けられた権威が、武力ではなく法輪（仏教）によって世界を統治する「転輪聖王」であって、いわゆるハーン号ではなかったからである。真意は分からないが、以後のアバタイの事績を見ていくと、それはアルタンの仏教事績に沿う形で進行している。すなわち、チベット僧に接触し、寺院を建立するという流れである。アルタンの事績でいえば、アセンラマ<sup>24)</sup>というチベット僧と知り合い、信心を起し、チベットよりソナムギャムツォを招聘することを決意し、そして謁見の場所として青海のチャブチャールに寺院を建立<sup>25)</sup>するというものである。アバタイにとって仏教事績は何を意味したか。そして、それによってハルハに何がもたらされたか。次章より、ハルハに入った「チベット僧」、ハルハで始めて建立される「寺院」に焦点を絞り、考察を進めていく。

## 2. ハルハに入ったチベット僧

アルタンの事績とアバタイの事績の相似性を考える

上で、もう1つ重要なのは、17世紀の史料に基づけば、アバタイがチベット仏教に入信するきっかけとなった僧が、アルタンの場合と同じくアムド（東北チベット）出身の僧であり、諸史料がそれらの僧をアルタンの下から派遣された僧としている点である。ANTには、アバタイがダライラマに謁見する前段階で、アバタイに信心を起こさせた、もしくはハルハに直接入ったチベット僧として、トンコル＝マンジュシュリ＝チャダスマリ（sdongkür manjusiri čadas mari）（以下、トンコル＝マンジュシュリ）、ゴマン＝ナンソ（sgomang nangsu）、サマラ＝ナンソ（samala nangsu）の名がある。これらの僧がチベット仏教界の如何なる地位にあったかを知ることは、ハルハに導入された初期のチベット仏教を見る上で重要な手掛かりになると思われる。

辛巳（1581）年、アバタイ28歳の時、デグルゲチ＝バートル（degürgeči bar-a-tur）の戸外に、モンゴルジン・トメトより一団の商人がやって来た。聞くところによると、彼ら（トメトの商人一団）の中にはバクシ（barsi＝ラマの称号とされる）と称せられる者がいて、そこで〔アバタイは〕使いを派遣してお迎えにあがった。

そのバクシの話では、「我らがゲゲーン（アルタン）＝ハーンのもとには、3宝とトンコル＝マンジュシュリ＝チャダスマリ（sdongkür manjusiri čadas mari）がいる」とのことであった。その話に、トシェート＝ハーン（アバタイ）は崇拜の心を大いに起し、そのバクシとキレグド（kiregüd）のアラク＝ダルハン（alay darqan）の2人を、ゲゲーン（アルタン）＝ハーンからラマを迎えるべく派遣した。

ゲゲーン＝ハーンは75歳のその年（1581年）、重病を患い、使者（アラク＝ダルハン）が到着した時には、すでに7日間も床に伏せて声も出ない状態であった。使者（アラク＝ダルハン）が来たと聞いて、〔アルタン〕はゴマン＝ナンソ（sgomang nangsu）を連れて〔ハルハに〕行けと命令を下し、すぐにお亡くなりになられた。

アラク＝ダルハンはラマ（ゴマン＝ナンソ）をお迎えし帰還した。ハーン（アバタイ）は齋戒し戒律によって法に入り、そのラマをたいへん尊崇した。（中略）

癸未（1583）年、サマラ＝ナンソ（samala nangsu）がやって来た。乙酉（1585）年の夏、〔アバタイは〕シャンホト（šanggututu）の北の城跡に



基壇を造り、その年に寺院を建立し〔始め〕た。  
(ANT、52r23-52v26)

まずトンコル＝マンジュシュリであるが、ANTによると、アバタイにハルハを訪れたトメトの商人一団の中にいたバクシを通して信心を起こさせたチベット僧とされる。トンコル＝マンジュシュリは、ESやETに見られる、トンコル＝ジャムヤン＝チュージェー＝ユンテン＝ギヤムツォ (stong 'khor 'jam dbyangs chos rje yon tan rgya mtsho) であると思われる。アルタンとダライラマ3世の会見後にダライラマの代理でトメトに入り、アルタンの側でモンゴルにおけるチベット仏教布教に尽力した僧であったとされる。

トンコルとはアムド(東北チベット)の交通の要衝にある寺で、トンコル＝マンジュシュリはトンコルの化身2代目の転生僧であった。アルタンとダライラマの会見時に、ダライラマより「文殊」の称号を授かったことによってトンコル＝マンジュシュリ(トンコル＝ジャムヤン＝チュージェー＝ユンテン＝ギヤムツォ)となった。アルタンの死の翌年1582年にトメトを離れ、チベットに赴き各地を巡って1587年に没した。青海湖の東に位置するトンコル寺歴代の転生僧としては、4代目がこの寺に根拠地を移したことにより始まり(若松1980、pp.328-320)、その名に「ジャムヤン(＝文殊＝マンジュシュリ)」という語を含む者が多い。

次にゴマン＝ナンソであるが、ANTによると、1581年のアルタンの死に際の指示に従い、ハルハの使者アラク＝ダルハンに伴ってアバタイのもとを訪れたチベット僧である。アバタイはゴマン＝ナンソを非常に尊崇したとされる。その名が示す通り、ゲルク派3大僧院<sup>26)</sup>の1つであるデプン('bras spungs)僧院に属するゴマン(sgo mang)学堂の僧侶であったかと思われる。チベット仏教の僧院社会におけるデプン僧院ゴマン学堂の特徴は、青海地域との繋がりがあげられ、この地域の僧の留学先や招聘元にはゴマン学堂があてられている(石濱2011、第4章、p114)。ANTによると、ゴマン＝ナンソはトンコル＝マンジュシュリと共にアルタンの側にいたことが窺える。とすれば、トメトのチベット仏教は、青海地域を基にしたゲルク派デプン僧院系の僧を指導者として迎え入れ、またハルハにおける初期のチベット仏教も、ゴマン＝ナンソが入ることでこの流れに属することになったのではないかと推察される。

続いてサマラ＝ナンソであるが、ANTによると、

1583年にハルハに入った僧である。誰の指示のもと来たのかは明確ではないが、名の音からチベット仏教の僧院社会におけるサムロ(bsam blo)＝カムツェン出身の僧であった可能性が考えられる。チベット仏教の僧院社会では、大僧院の下部に複数の学堂があり、さらにその下部に「カムツェン」(khamts tshan)「ミツェン」(mi tshan)という集団組織がある。例えば留学僧は出身地域ごとのまとまりであるカムツェン、特定の間人集団を意味するミツェンに分かれて生活を共にし、その縁は一生続くとされる(石濱2011、第4章、p108)。池尻氏の研究(2012)によれば、アムド東部出身の僧は、チベットに留学した際にはサムロ＝カムツェンに属すといわれる。サムロ＝カムツェンはゲルク派3大僧院のすべてにあり、もちろんゴマン学堂にもサムロ＝カムツェンは含まれている(石濱2011、第4章、表4-1、p109)。以上をあわせると、ANTに記されているサマラ＝ナンソは、アムド東部の出身で、さらにゴマン＝ナンソと同系のチベット僧であった可能性が出てくる。

結論として、ANTに記されている僧のチベット仏教界における位置づけは、アムドの僧や、アムド出身のゲルク派デプン僧院ゴマン学堂に属した僧およびその系統の僧と判断される。ところで、池尻氏は清朝初期のチベットとの関係や北京におけるチベット仏教界の形成にアムド出身の僧の尽力<sup>27)</sup>があったことを明らかにしている(池尻2012)。このことは、ハルハにおける初期のチベット仏教の指導に、トンコル＝マンジュシュリ、ゴマン＝ナンソ、サマラ＝ナンソといったアムド系の僧があたっていたと思われる点にも共通している。さらに、アルタンに最初にチベット仏教への信心を起こさせたとされるアセンラマはアムド・ゾルゲ地方のチベット僧であった。以上のことから、この時期のチベット仏教ゲルク派の清朝やモンゴルにおける布教の過程には、まずその初期段階でアムドのような中央チベット以外の僧や、ゴマン学堂のナンソ(寺の執事)のような中央チベットでも末端に位置すると思われる僧が、その布教対象地域に入り、その地域の権力者などに信心を起こさせるという類型があったのではないかと読み取れるのである。

### 3. 初期エルデニ・ジョーの様相

アルタンがダライラマ3世との会見に先立って青海のチャブチャールに寺院を建立したように、1585年、アバタイもハルハにおけるチベット仏教受容の拠点と

なる寺院、エルデニ・ジョーを建立した。「シャンホトの山の北の城跡に基壇を造り、その年に寺院を建立し〔始め〕た」(ANT、52v23-26)とあるように、エルデニ・ジョーは「城跡」すなわちモンゴル帝国の古都カラコルム<sup>28)</sup>の遺構を基に建立された。

上記の史料で「建立し〔始め〕た」と記されており、また「その寺院(エルデニジョー)は建造〔開始〕より現在の第11ラプチュンの丁巳(1677)年にまで及び、すでに93年をも要していた」(ANT、52v26-29)との記事が後に続くように、エルデニ・ジョーが「落慶」したと認識されるまでには、建造を始めてから93年を経ていることが分かる。つまり、アバタイが1585年に建立した寺は規模の小さなものであり、その後もアバタイやその継承者が不断に修復と建て増しをした結果、日ごとに大規模なものになっていったことが推測される。さて、ここではアバタイが導入したとされるチベット仏教が如何なる内容であったかという部分に限定し、考察を進める。

『History of Erdene zuu』(以下、HE)<sup>29)</sup>では、1585年から1587年にかけてアバタイが最初に建立した寺は「ゴル・ゾー(ジョー)寺」と呼ばれ、このゴルという名前から、サキャ派の一支派ゴル派がその建築に関わっていたことが知られる。HEはアバタイの時代から時を経て書かれているため、その信憑性は不明であるが、石濱2011の第1章にリンデンがチベットから招いた高僧シャルハ=フトクトがサキャ派の僧であった可能性が指摘されており、また、石濱2011の第二章では、満洲王朝が初期の都瀋陽に最初に建立したチベット寺、實勝寺がゴル派のビリクト=ナンソによっていたことが指摘されているため、ハルハの最初の寺の建立にサキャ派やその支派ゴル派の僧が関わっていた可能性は十分にある。

次に、エルデニ・ジョーという通称の一部を成すジョーという言葉について考察する。「ジョー」(Mon. juu)はチベット語のjo boであり、ジョー・シャカムニ(釈迦牟尼尊)の略称である。チベットの年代記によると、7世紀、ソンツェンガムボ王が現れてチベットを統一すると、ネパールと唐からそれぞれ妃を娶り、インド仏教と中国仏教をチベットに導入した。それぞれの妃は出身国の釈迦牟尼像をチベットにもたらし、その2体の釈迦像(ジョー)を祀る2つの寺を中心に現在のラサの街は形成された。中国妃が唐からもたらしたジョー・シャカムニはネパール妃の建立したトゥルナン寺に祀られ、この寺はジョカン(jo khang)、すなわち釈迦堂と通称されている。

ゴル・ジョーにしる、エルデニ・ジョーにしる、ジョーという名前がついたアバタイの寺は、ラサのジョー・シャカムニと同じ型の釈迦牟尼像が祀られていた可能性は高い。そう推測する根拠として、アバタイより以前にチベット仏教と接触したアルタンが、ダライラマ3世により、ラサのジョー・シャカムニと同じ釈迦牟尼像を祀る寺を建てることを勧められていること、その勧めに従ってアルタンの息子センゲがフフホトにジョー・シャカムニの寺を建立していることがあげられる(ES)。アバタイもチベットに初めて仏教が導入された時の故事に因み、エルデニ・ジョーにラサのジョー・シャカムニに像を祀った可能性は高いであろう。

次にエルデニ・ジョーの初代座主についてであるが、HEによればグーシ=チョルジという僧であり、ESに見られるシレート=グーシ=チョルジ(sirege-tü gūsi čorji)であると思われる。この僧は1588年にダライラマ3世が没した後、その転生者にアルタンの孫を認定するため、使いとしてチベットに赴きラマを招聘した僧とされる。

黒い辰年から白い子年に至るまで、／一切の母である般若波羅密多経を翻訳して書籍となした。／ハーン、ハトンなど皆で是として、／一切智者ダライ=ラマのお言葉によって、西方の常住の地に、／一千五百両によって作った銀のマンダラをはじめとして、／多種多様な財宝を常住の地に届けて、／常に勝利した聖釈迦牟尼に供施波羅密を献じて、／茶布施・割布施などを配るために、使者としてシレート=グーシ=チョルジ(sirege-tü gūsi čorji)など／(中略)を集めて、／無比のハーンとハトンは面と向かって指図して、直ちに送り出した。(ES、360-362、『アルタン=ハーン伝』訳注、pp. 197-198)

『アルタン=ハーン伝』訳注と烏蘭(2002)<sup>30)</sup>によると、シレート=グーシ=チョルジは、1578年のアルタンとダライラマ3世の会見時に、ダライラマに従ってトメトに入り、そのままアルタンのもとでモンゴルにおけるチベット仏教布教に大きな役割を果たした僧とされる。そして、1586年のアバタイとダライラマの会見後には、今度はアバタイに従ってダライラマの代理でハルハに入り、そこでの布教活動に尽力したともいわれている。ところで、上のESの記事はダライラマ3世の死後、1588年以降の話である。とすれば、シレート=グーシ=チョルジはハルハには行かな

かったか、もしくは行ってからまたトメトに戻ってきたということになる。『アルタン＝ハーン伝』訳注と烏蘭（2002）には、シレート＝ゲーシ＝チョルジの主な仏教事業として仏典翻訳<sup>31)</sup>があげられ、それがトメトのチベット仏教の発展に大きく貢献したといわれている。それがESの「黒い辰年（1592年）から白い子年（1600年）に至るまで、一切の母である般若波羅密多経を翻訳して書籍とした」を指すのであれば、シレート＝ゲーシ＝チョルジは1592年から1600年にかけてはトメトを拠点にしていた可能性が高くなる。果して、シレート＝ゲーシ＝チョルジはハルハには行かなかったのであろうか。

HEにある、エルデニ・ジョーの2代目座主の項目<sup>32)</sup>に、この2代目座主はシレート＝ゲーシ＝チョルジがハルハに来るまでの期間、代理でこの職に就いていたことが記されている。この人物がそのまま初代座主とされなかったということは、シレート＝ゲーシ＝チョルジがエルデニ・ジョーの初代座主に就くことが予め決まっていたことを示す証拠ともいえる。とすれば、シレート＝ゲーシ＝チョルジは1586年のアバタイとダライラマの会見後、アバタイに従いハルハに入ってエルデニ・ジョーの初代座主に就くことを確定させたが、1588年のダライラマ3世の死に際して一旦トメトに戻り、17世になって再びハルハに入りエルデニ・ジョーの座主に就いた、と仮定してもESの記事に食い違うことはない。確かなことは分からないが、このシレート＝ゲーシ＝チョルジがエルデニ・ジョーの初代座主であったとしたら、以上のシレート＝ゲーシ＝チョルジのチベット仏教界における位置づけから、アバタイが導入したチベット仏教はきわめてダライラマの宗派ゲルク派寄りであったことが推察される。

さて、アバタイは1585年にエルデニ・ジョーを建立させると、アルタン同様、ダライラマ3世との会見に赴くことになる。1586年、トメト巡錫中のダライラマのもとで、アバタイはついに謁見の時を迎える。ANTによると、この謁見に際し、アバタイは千頭の驢馬をはじめ多くの金銀財物をダライラマに献上し、さらにアルタンがフビライに倣ったように、ダライラマよりヘーヴァジュラ灌頂<sup>33)</sup>を授かった（ANT、53r6-7）。そして、ダライラマより授かるアバタイのハーン号の根拠ともいえる遣り取りが交わされることになった。

〔ダライラマが〕一つのゲルを満たすほどの仏像の中から仏像を選ばせた。〔アバタイは〕1

つの古い仏像を選んだ。それはパグモドゥパ（pagmu-roba）の像であった。ダライラマが言われた「〔以前この〕場を満たす仏像に相応するものが家屋と共に火災にあった時、〔その仏像は〕燃えずに済んだ、それは大きな力を有するものである」また、親指ほどの釈迦牟尼の舍利を〔アバタイに〕賜り、1つの緑松石において創造されたチャクラサンヴァラ（čagr-a sambar-a）<sup>34)</sup>像をはじめとする多くの靈験あらたかな礼品と虎の毛皮のゲル、経典の寄贈などもされた。〔そして〕「〔なんじは〕ワチルワニ（vačirbani）の化身である」という承認を約束され、「ノモン＝イェケ＝ワチル＝ハーン（nom un yeke včir qaγan）」という称号を授けた。そうして、〔アバタイは〕〔自ら〕北上して、ハラオロン（qar-aöling）における大野営地に帰還し、ハルハの群衆を釈迦牟尼の教法へと導き始めた。（AN、53r7-27）

アバタイは自分がひきあてたパグモドゥ＝ドルジェゲルポの像に因んで、「ドルジェ」＝「ワチル」＝「金剛」、すなわち「金剛手菩薩」の化身と認定され、併せて「金剛」の言葉を含むハーン号をダライラマより授かった。こうして、ダライラマというチベット仏教の高僧に謁見し、灌頂を授けられ、そして仏典や仏像を持ち帰ったことはハルハの衆の服するところとなり、アバタイは名実ともにハルハのハーンになったと17世紀のハルハで認識されたのである。

## おわりに

1586年にアバタイがダライラマ3世より授けられたハーン号は、チングスの直系が継承していくハーン号とは異なり、チベット仏教に基づく、それまでには見られなかった形のハーン号であった。ただ、権威の正統性はフビライの仏教事績を根拠とするモンゴルのもう一つの王権観によって裏づけられていた。17世紀になって、ハルハの3ハーンやオイラトのハーンが、こうしたチベット仏教に基づく権威によって確立していったことを考えると、アバタイの事例はその嚆矢ともいえる。また、それに伴ってハルハにもたらされたチベット仏教は、アムドのような中央チベット以外の僧侶が先導していたと思われ、アルタンの事例や清朝の事例との共通性から、ゲルク派による布教のタイプの1つを見出すことができる。さらに、初期のエルデニ・ジョーについては、ダライラマの代わりとしてトメト



に入ったチベット僧シレート=ゲーシ=チオルジが座主になったとされ、もしそうであったなら、ハルハのチベット仏教の初期段階はダライラマの宗派ゲルク派主導であった可能性も出てくる。以上、アバタイがダライラマより授けられたハーン号の意味や、ハルハに導入されたチベット仏教の特徴については可能な限り論じられたかと思われる。

## 註

- 1) batu möngke dayan qaγan 1464-1543 (諸説あり)。
- 2) geresenje žalayir-un qung tayiji 1513-1547。
- 3) ハルハはゲレセンジェの7人の息子らに因んで7旗(ホシューン)ハルハと称されていた。
- 4) モンゴルの集団名称の1つ。万戸(トゥメン)を構成する単位でもある。
- 5) セレンゲ河は、ハンガイ山脈に源を発し、バイカル湖に注ぐ河。
- 6) bsod nams rgya mtsho 1543-1588。チベット仏教ゲルク派の高僧。当時はデブン僧院の座主。いわゆるダライラマ政権は5世の時代1642年より始まる。ソナムギャムツォのモンゴル語訳がダライで、アルタン=ハーンが奉った持金剛ダライラマの称号が由来。
- 7) rje btsun blo bzang bstan pa'i rgyal mtshan dpal bzang po 1635-1723。アバタイの曾孫であり、トシェート=ハーン=チャグドルジ(čayun dorji)の弟ザナバザル。出家し、ダライラマよりジェブツンダムパの化身と認定され、ハルハ随一の高僧といわれるようになる。8代目の転生者(1869-1924、在位1912-1920)はボグドハーン政権の元首。
- 8) フフホトを含む現在の中国内モンゴル自治区の中西部地域。
- 9) altan qaγan 1507-1581。詳細は第1章。
- 10) 『erdeni tunumal neretü-yin sudur』トメト部の首長アルタン=ハーンの伝記。伝記に記されている最後の年が1607年であり、17世紀前期に成立したとされる。
- 11) 『erdeni-yin tobči』オールドス部のサガン=セチェン(sayang sečen 1604?)が著したモンゴル年代記。1662年に成立したとされる。
- 12) 『asarayči neretü-yin teüke』ハルハ・サインノヤン部の首長ビヤムバ=エルケダイチン(byamba erke dayičing)が著したハルハの年代記。成立は1677年とされる。
- 13) チベット語版の著者は、ジェブツンダムパの弟子であるザヤパンディタ=ロサンティンレー(blo bzang `phrin las 1642-1715)。成立は18世紀初頭とされ、数ある『ジェブツンダムパ伝』の中でもっとも古いとされている。
- 14) ES、324-2。ET、83r。ANT、53r20-22。KPN、63b。ANTとKPNは本稿に記載。
- 15) qubilai qaγan 1215-1294。モンゴルの正統ハーン以外にも、中国統一王朝・元の創始者である世祖、チベット僧パクパに帰依することで具わった「転輪聖王」としての顔も持つ。
- 16) 13世紀、チンギスの子孫のうちゴダンはチベットに侵入し、チベット側に支配されたくなければ代りに聖者を差し出せとの通告をした。サキヤパンディタとその甥パクパとチャクナはそのためモンゴル宮廷に入ったとされる。
- 17) lingdan qaγan 159?-1634。仏教事績は、1617年にサキヤ派の高僧シャルパ=フトクトから灌頂を授かり、パクパ鑄造のマハーカーラの仏像を賜り、定住都市チャガンホトを築いてチベット仏教寺院を建立、また大蔵経をモンゴル語に翻訳した(石濱2011、第1章、p14)。
- 18) 古代インド思想に起源を持つ理想の王者像。武力を用いず法輪によって世界を統治する者。菩薩が在家の姿でこの世に現れ、有情の利益をなすとされる。
- 19) 宝音徳力根(1999)
- 20) 宝音徳力根(1999)、烏雲畢力格(2008)
- 21) アバタイのハーン号は、孫のゴンボ gömbü の継承より「トシェート=ハーン」と呼ばれるようになり、以後、その名称は固定される。ゴンボの即位年は正確には分からないが、1630年頃とされる(烏雲畢力格2008)。1673年まで在位していたとされる。
- 22) phag mo grub rdo rje rgyal po(1110-1170)。カギユ派ミラレパの弟子の1人ダクボラジェ(ダクパ=カギユ派)の4大弟子の1人。パグモドゥ=カギユ派の開祖。
- 23) 「唐古特」は清朝期のチベットの呼称であるが、ダライラマ3世は1685年から1688年にかけてトメトを巡錫中、チベットには居なかった。アルタンが導入したトメトのチベット仏教の寺院や聖地のことだと思われる。
- 24) アムド(東北チベット)・ゾルゲ地方の僧侶。ダライラマの母親の近親であったことから、asing lama(=母方の祖父のラマ)と呼ばれた。デブン僧院で学んだ後、五台山へ行き、トメトに入り、

アルタンに近づいたといわれている。アムドのサムラウ (samlau) 氏の出身とされる。このサムラウは、2章で述べる「サムロ」カムツェンと関係があるかもしれない。(『アルタン=ハーン伝』訳注、p316)

- 25) čabčiyal。現在の青海省共和にあたる。寺院の建立は1574年とも1576年ともいわれ、1577年に明朝皇帝より「仰華寺」を賜るが、1591年に明軍によって焼き払われる。(『アルタン=ハーン伝』訳注、p316)
- 26) ラサにあるセラ僧院、デプン僧院、ガンデン僧院。ガンデン僧院がゲルク派総本山。
- 27) 清朝初期のチベットとの繋がりや北京におけるチベット仏教界の形成には、シレトウ=フレーという集団が中心的役割を担っており、アムド東部のパージョ・ウシタク両寺院はその人材供給源であった(池尻2012)。
- 28) ウランバートルから西へ400km、オルホン河畔に位置する。チングスが兵站基地をこの地に造営、2代目のハーン・オゴデイが宮殿・城壁を築きモンゴル帝国の首都に定めた。
- 29) 16世紀末から21世紀初頭までのエルデニ・ジョーについて、19世紀初頭にこの寺で著された『エルデネ・ゾー縁起』を中心に制作された歴史書。N.ハタンバートル/Yo.ナイガル著、A.オチル監修。2005年刊行(モンゴル国立歴史博物館、エルデネ・ゾー博物館)。日本語訳は、清水奈都紀訳『エルデネ・ゾー史(16-20世紀)』として2012年に刊行(大谷大学 松川節研究室)。本稿は日本語版を使用。
- 30) 『アルタン=ハーン伝』訳注、pp403-404。烏蘭(2002)、pp448-449。
- 31) 1592年から1600年に亘って『十二卷本般若波羅密多経』。1602年から1607年にかけてカンギュル (bka' gyur チベット大蔵経) のモンゴル語訳に従事したとされている。
- 32) HEによると、『エルデネ・ゾー縁起』以外にエルデニ・ジョー2代目座主についての明確な記録はないとされる。史料では、この人物が座主としてアバタイの存命中にジェブツンダムパ誕生の予言をしていることから、初代シレート=ゲーシ=チョルジが17世紀になってエルデニ・ジョーに入るまでの期間、代理で座主を務めていたのではないかとしている。
- 33) 灌頂 (Skt. abhiṣeka / Tib. dbang) とは、仏の力を

授かること、その儀礼。導師が自身と本尊の身体・言葉・心を一体化させ、その力を弟子に授ける。そうして弟子はその仏を本尊とする修行の許可を得る。ヘーヴァジュラ (kyai rdor. P.No.10.) は最高ランクの無上ヨーガタントラに属し、チベット仏教サキャ派が最も重んじた。

- 34) 『勝樂タントラ』。無上ヨーガタントラに属する。ゲルク派は他に『グヒヤサマージャ(秘密集会タントラ)』『ヴァジュラバイラヴァ(大威徳金剛タントラ)』を含め、これらを三大密教経典 (gsang bde 'jigs gsum) として重んじる。

### 史料

『アサラクチ=ネレティン=トゥーフ』

Byamsba erke daicing. *Asarayci Neretü yin teüke*. 1677. 烏雲畢力格『《阿薩喇克其史》研究』(中央民族大学出版社、2009)(ANT)

『エルデニ=イン=トプチ』

Sayan secen, *Qad-un ündüsün-ü erdeni yin tobci*. 1662. (ET) → 『蒙古源流』、『《蒙古源流》研究』

『アルタン=ハーン伝』

Erdeni tunumal neretü yin sudur. n.d. (ES)

→ 『アルタン・ハーン伝訳注』

『ジェブツンダムパ伝』

blo bzang 'phrin las, dza ya paNDita (1642-1708) . *sh'a kya'i btsun pa blo bzang 'phrin las kyi zab pa dang rgya che ba'i dam pa'i chos kyi thob yig gsal ba'i me long*. 1702. Reproduced in the Collected Works of Jaya paNDita blo bzang 'phrin las. ŚATA-PITAKA SERIES, vol.281. New Delhi. (KPN)

『欽定外藩蒙古回部王公表伝』(四庫全書454、上海古籍出版社、198-)

### 文献

宝音徳力根「从阿巴岱汗与俺答汗的關係看早期喀尔喀歷史的幾個問題」(『内蒙古大学学报(蒙文版)』、1999)

姑茄瑪「《阿薩喇克其史》所記阿巴岱汗的佛事活動」(内蒙古大学 蒙古学研究中心、内蒙古 呼和浩特 010021. 中图分类号:B949.9 文献標識碼:A,2008)

烏蘭『《蒙古源流》研究』(遼寧民族出版社、2002)

烏雲畢力格「喀尔喀三汗的登場」(歴史研究、2008)

N.ハタンバートル/Yo.ナイガル著、A.オチル監修『History of Erdene zuu』(モンゴル国立歴史博物



- 館 エルデネ・ゾー博物館、2005) →清水奈都  
紀訳『エルデネ・ゾー史(16 - 20世紀)』(大  
谷大学 松川節研究室、2012) (HE)
- 池尻陽子「成立初期の清朝におけるアムドの寺院と僧  
たち」(『日本西藏学会会報』第58号、2012)
- 石濱裕美子  
『チベット仏教世界の歴史的研究』(東方書店、  
2001)  
『清朝とチベット仏教—菩薩王となった乾隆帝—』  
(早稲田大学出版、2011)
- 岡田英弘訳注『蒙古源流』(刀水書房、2004)
- 吉田順一 他 共訳注『アルタン・ハーン伝訳注』(風  
間書房、1998)
- 若松寛「西寧トンコル・フトクトの事蹟」(『立命館文  
学』、418-421 合併、1980)
- 大正大学総合佛教研究所モンゴル佛典研究会訳注『モ  
ンゴル佛教史』研究(1)(2)(3) (大正大学総合  
佛教研究所研究叢書 第8巻 2002、第16巻  
2006、第23巻 2012)